

原 著

KRAS 野生型進行大腸癌に対する 1st line 化学療法における 抗 VEGF 抗体と抗 EGFR 抗体の腫瘍径縮小率に関する検討

村 田 一 平, 塩 澤 学, 浅 利 昌 大, 片 山 雄 介,
沼 田 幸 司, 澤 崎 翔, 樋 口 晃 生, 五 代 天 偉,
森 永 聡一郎, 赤 池 信

神奈川県立がんセンター 消化器外科

要 旨：目的：1st line で分子標的治療薬を併用された KRAS 野生型進行再発大腸癌を対象に，抗 VEGF 抗体と抗 EGFR 抗体の腫瘍径縮小率の比較を retrospective に行った．方法：対象は抗 VEGF 抗体使用（V 群）14例と抗 EGFR 抗体使用（E 群）18例．このうち腫瘍径縮小効果を認めた症例の最大腫瘍径縮小率および腫瘍縮小速度を比較した．肝転移症例に関しても同様の検討をおこなった．結果：最大腫瘍径縮小率は V 群 $38.1 \pm 5.9\%$ ，E 群 $57.2 \pm 5.4\%$ （ $p = 0.030$ ）と有意差を認めた．腫瘍縮小速度は V 群 $14.2 \pm 2.8\%$ /month，E 群 $18.3 \pm 2.0\%$ /month であり有意差は認めなかった（ $p = 0.273$ ）．肝転移では，E 群が V 群と比較し腫瘍縮小速度が有意に高かったが，最大腫瘍径縮小率に関しては有意差を認めなかった．結語：抗 VEGF 抗体と抗 EGFR 抗体において腫瘍縮小速度に差はないが，抗 EGFR 抗体の方が最大腫瘍径縮小率が高く，腫瘍径縮小効果が高いと考えられた．腫瘍径縮小効果が高いほど conversion therapy を行える可能性があるため，症例ごとに適切なレジメンを考慮すべきである．

Key words: 腫瘍径縮小率（reduction rate of tumor size），分子標的治療薬（molecularly-targeted drug），進行再発大腸癌（advanced colorectal cancer），KRAS 野生型（KRAS wild type）腫瘍縮小効果（effect of tumor shrinkage）